
誰よりも愛した君へ

青柳朔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

誰よりも愛した君へ

【Zコード】

Z8982C

【作者名】

青柳朔

【あらすじ】

イシュヴィリアナの王子・アジムの影武者として生きてきたジルダス。彼は処刑される王子に代わって、その儚い命を散らした最愛の人へ、伝え切れなかつた想いを書き残して。この作品のみでも読めますが、同一世界が舞台となつている「月のない空、君と一輪の青い花」もしくは「太陽の消えた国、君の額の赤い花」を読まれた方がよりお楽しみいただけると思います。

(前書き)

これは「月のない空、君と一輪の青い花」と「太陽の消えた国、君の額の赤い花」で登場する青年・ジルダスの話です。この話だけでも読めるとと思いますが……どちらかを読まれてから見ていただく方がお楽しみいただけだと思います。

リオ。

今、君はきちんとこの手紙を読んでくれるだろ？
怒つて、
破り捨てたりしていないことを心から祈るよ。君ならやりかねない
から。

破り捨てるのなら、どうか読み終わってからにしてほしい。情け
ない話だけど、俺は君に一番伝えたいことをいつも言えなかっただ
から。

あつさつと書き連ねることができたら簡単だけど、それもできそ
うはない。結局かつこ悪い男のままで、ゆっくり君に伝えようと思
っていた。

けれどもう時間はないから。

こんな形でしか君に何かを遺すことのできない俺を、許してください。

「殿下」

凛とした、美しい女性の声に聞き覚えがあった。

振り返れば、そこには予想通りの人物が立っていたので、アジム
はさほど驚かなかった。

殿下と、そう呼ばれるのも久しぶりだな、と苦笑する。イシュヴィ
リアナの王子という立場を捨て、男として生きていくことを選ん
でからは誰も呼ぶことがなかった。

木漏れ日の中に彼女は立っていた。

「リオ」

「……お久しぶりです」

リオと呼ばれた女性は、淡く微笑んだ。今にも散りそうな桜の花

のよつた、憐い笑顔だつた。

アジムは、女性のそんな表情を今まで見たことがなかつた。アジムの知る彼女は戦場を駆け、剣を振るつ、戦の女神のよつた姿だ。

「……どうして、ここに？」

アジムはリオの憐い微笑みにつられるよつて笑う。

アジムとリオの故郷であるイシュヴィリアナは、もうない。久しふりに感傷に浸つてもいいだろうか。

ここは砂漠に囲まれた、神に愛される土地・オアシス。他の国では見たこともないよつた立派な木々が根を生やしている。

「預かつた言葉を伝えに。…私の最愛の友から」

「それは……」

アジムはたつた一つの心当たりを思い浮かべた。
リオはやはり微笑み、アジムを見つめるだけだつた。

君に出会つたのはガザリアとの戦いの最中だつたと思う。君は覚えているだらうか。

アジム様をかばい、負傷した俺を運んだのが君だつた。

そして君はこう言つたんだ。

『誰かの為にしか生きられない人間は弱虫だ。戦場に弱虫などいらぬ』

正直ものすこく腹がたつたよ。

俺にとつてアジム様の為に生きることはどんなことよりも誇らしいことだつたから。こんなことを書いたら、また君は怒るんだろうね。

でも俺は言い返さなかつた。出血がひどくて意識を失つたから。目が覚めても君はいた。その頃にはもうあらかた戦いは終わつていた。

目を開けた時、君を一番に見つけた時、君はとても綺麗だつたんだ。薄汚れた、あちらこちらに怪我をした兵士が横たわる部屋の中にいて、君だつて傷だらけだつたつていうの、とても綺麗だつたんだ。今まで言わなかつたけどね。そんなこと口に出して言えるような男じやないつてことは君もよく知つてゐるだろ？

……それから、なぜだろ？

君は俺のことを嫌つてゐるやつだったのに、俺達はよく話すやつになつた。

君に嫌われてゐると、俺はそう思つてゐたよ。

そう、君が俺に初めて泣き顔を見せる、あの時までは。

肩から腹にかけて、とても熱かつた。

それが自分が斬られたからだと気がついた頃には地面に倒れていった。あの時の空が可笑しなくらい明るくて、どこまでも青くて、自分このんな状況を、世界は喜んでいるように感じたよ。それほど世界は輝いていた。

でも、そんな不安を一気に消し去つたのは君だよ。

「ジル！ ジルダス！ しつかりしろ！」

今でもはつきりと覚えている。

声はいつもの君だつたのに、俺を抱き起こして見る君の顔。君の目は、今にも泣きそうだつた。

あの時、君に命を救われたんだ。

そのまま意識を手放しても、ぬくもりは感じていたよ、だからあの時冥府に下らなかつたんだろう。

目を開けて、いつかと同じよつに君が一番に目に映つて、俺がどれだけ嬉しかつたか、君は知らないだろ？ 世界が俺を拒絶しても平氣だと思つぐらい、幸せだつたんだ。

「……氣がついたか？ ジル」

「ああ、大丈夫だ」

君にそう答えてから自分がベットの上で横になっていることに気づいた。ガザリアの時とは違つて、別室で手当てされていただろう、とても静かだつた。

「おまえは本当に馬鹿じゃないのか、一度だけじゃなく、一度も…」

「…」
簡素な椅子に座つて俺を見てくる君の顔を見たら、とても嬉しくなつた。

「ひどいな、俺にとつてアジム様をお守りすることは当たり前のことに」

またアジム様をかばつた俺を、君は信じられないといった顔で見つめてきた。

「どうして…？」

「俺はアジム様に救われた。どうしようもなくて、ただ死を待つだけだった子供の俺を、同じくらいだつたアジム様は導いてくださつた。生きがいまで俺に与え、住む場所も、食事も。どうせあの時アジム様に助けていただけなかつたら、俺は死んでいる。だから、アジム様の為に生きると決めたんだ」

「…ああ、でも。

伸ばした手がいつもよりも重くて、それでもあの時、君に触れたかつたんだ。頬に触れた俺の手を、君は握り締めてくれた。

「アジム様に会つよりも、前に、リオに出来ていたら、もしかしたら…」

「え？」

「リオの為に、生きていたかもしれない

今思つと顔から火が出そくなぐらい恥ずかしいセリフだと思つよ、本当に。記憶から抹消したいくらいにね。

それでも、君の為に生きたいと、思つたんだよ。

アジム様よりも先に君に出会えていたら。そうしたら。

きつと俺は君のために命を張つただろ!」
アジム様と同様に、俺にとつて君は無くてはならない存在なんだ。

言葉には、できなかつたけど。

大きな木の影で涼みながら、アジムとリオは話し始めた。長い話になりそだつたが、どちらからも座ろうとはしなかつた。

「ジルが、殿下はここにいると、そう言つていたので」

「リオ、俺はもう……」

「失礼しました、もう殿下といつのは変ですね。アジム様」
慣れてしまつていて、とリオは困つたように笑う。

イシュヴィリアナはもう存在しない。オルヴィスという国に飲み込まれ、そして王子であるアジムは処刑された。されたことに、なつてている。

「オアシスの新君主の婿が決まつたと、私の所にも伝わってきたので……アジム様に違いないと間違いでなくて良かつた」

水の匂いを含んだ、涼しい風がリオの短い髪を揺らした。

「……リオ、俺を恨んでいるか?」

國を捨てて、自分の恋を選んだ王子を。

「いいえ」

躊躇いがちに問いかけたアジムに、リオはきつぱりと首を横に振つた。

「恨んでなど……ええ、私が貴方を恨むことなんて一つもありません

ん

「しかし……」

「アジム様、私はジルの言葉を伝えたいのです。きっと、貴方に必要な言葉だと思うから。私がなぜ貴方を恨まないのかも、それでわかります」

そう言つて、彼女はぽつぽつと語り始めた。

オルヴィイスとの戦いは絶望的だった。

あそここの國の國王の手腕はよほどの物だと思つよ。きっと、いざれ大国にのし上がるだろう。

もともとイシュヴィリアナはそう長くはなかつた。君もきっと気づいていたんじゃないかな。

それでも戦わずにはいられなかつた。俺達は、國と王を護る為の存在だつたから。何よりもイシュヴィリアナを愛していたから。それでも無理だつた。

俺に残された時間もわずかだつた。

日ごとに吐く血の量は増えていたし、戦争で生き残つても後半年はもたなかつた。

動物はやはり、自分の死期が分かるらしい。

「……辛いのか、ジル」

唯一俺の病を知つていた君はことあるごとに心配してくれた。君に気にかけてほしくてわざと大袈裟に振舞つたこともあつたよ。今だから白状するけどね。

結局、陛下はオルヴィイス軍の手に殺され、アジム様さえ捕らえられた。

だから、行かなければならなかつた。アジム様の影として。俺は、アジム様の痛みを全て引き受ける為に生きてきたのだから。自分の容姿があの時ほど役に立つたことはなかつただろうね。

オルヴィイスとの戦も終わり、一人で静かに暮らそつと、町外れの家に住んでいた頃はとても幸せだつたよ。

「ジル！ どこに行くんだ、そんな身体で……」

「アジム様の所へ」

「ジル……！」

君が腕に縋つて止めてきた時はさすがに固い決心も崩れかけたよ。それほど君は弱弱しい顔をしていたよ。気がつかなかつただろう？「おまえは十分に尽くしたじゃないか……！」これ以上できることなんてもうないんだ！

「あるよ、リオ。俺が今までアジム様の影武者であったことを、君は知つているだろ？」

「代わりに死ぬつていつのか！」

悲鳴にも似た声だつた。

自分が君にこんな悲痛な声を出させていると想つとやつきれない。「俺はもう長くない。しかしアジム様には未来がある。の方には願いもある。こんな病魔に侵された身体がまだ役にたつというのなら、俺はなんでもするよ」

「ジルダス！」

「この身体はアジム様に、心は君に捧げる
「そんなものいらない！ 行くなジルダス！！」
もう君の叫びが聞きたくなかった。

だから、キスした。

思つたとおり君は不意をつかれて隙ができただろう？

「ごめん、リオ……」

君の赤い瞳をこの目に灼きつけた。

これが、俺の記憶の最後の君だから。

きっと君は怒つてゐるだろう。

怒つた君の顔も好きだった、なんて言つたら君は照れた後で俺のことを殴るだらうな。

今、牢の中でこれを書いている。ここは暗いし寒い。字が上手く書けているか自信がないよ。

アジム様は今頃国外に出ていられるだらう。

それで、図々しいけど、君に一つお願ひがあるんだ。

アジム様に伝えて欲しい。いつか、あの方と出会うことがあるので

なら。きっとアジム様は神に愛された土地の姫君に会いに行くだろうから。

俺は後悔などしていない、と。

アジム・アブラシード・イシュヴィリアナとして死ねることが、とても誇らしいんだ。誰よりも尊敬していたアジム様として死ねるのだから。死を待つしかない病で死ぬのではなく、誇り高きイシュヴィリアナの為に死ぬのだから。

それにね、リオ。

俺はアジム様の為だけに死ぬわけじゃないんだよ。

後悔があるとしたら、それは君を遺して逝くことで、でもそれはいずれそう遠くない日に結局訪れるものだから、しかたない。

しかたない、なんて、また君を怒らせるかな。

君はいつこの手紙を読んでいるのだろうか。

きっと、俺はもうこの世にいないのだろう。

怒つていい。俺を恨んでもいい。

勝手な願いだけど、どうか君は生きて。

君が何よりも大切だったよ。

君が誰よりも大事だったよ。

これだけ長々と書き連ねているのに、やっぱり気の利いたいい言葉は見つからない。どうすれば、どんな言葉よりも強く君の心に染み渡るだろうか。

君の心に、永遠に残るような言葉を知っていたら良かった。

君は俺が見てきたものなかで、何よりも綺麗だった。

凛とした声も、真っ直ぐに伸びた背筋も、短く切られた黒髪も、赤い瞳も。

この世界のどんなものよりも綺麗だよ。

ああ、どうしたら君にこの思いを伝えられる?

分からぬけれど、君がいなければ俺はどうしようもなく駄目な人間だった。君という存在で、俺の人生はどんな宝石にも負けないくらい輝いていた。アジム様よりも、大事だったんだ。ずっと、長

い間言えなかつたけれど。

君が引き止めてくれた時、本当に迷つたんだ。

君と残りの時間を一人きりで過ごせたら、きっとそれは幸せに満ちた時間だつたんだろうと思うよ。

でも、それはきっと、俺がこの世を去つた時に君に大きな悲しみを与えるだろうと、そう思つたんだ。

君を傷つけたくなかつた。あまり悲しませたくなかつた。

だから、俺はこんな道しか選べない。

君の制止を振り切り、勝手に死んだ俺のことを怒つてくれ。恨んでくれ。憎んでくれ。

それはきっと、君の心に火を灯す。生きる力になる。
どうか、生きて。
リオ。

「ジルダス……」

リオがすべてを話し終えた後、アジムはそう呟いた。
幼い頃から共に居た青年を想つた。
自分として、死んでいった青年を。

「彼の、言葉は確かに伝えました。殿下……いいえ、アジム様。どうか、幸せになつてください。ジルも、きっとそれを望んでいる」「リオ」

アジムは顔を上げ、凜とした美しい女性を見る。

彼女は泣いていなかつた。

泣きそうな顔をして、ただそこに立つていた。だから、アジムも泣くことができなかつた。

「彼も幸せだつた。だから、アジム様が気に病むことなどなにもありません。彼が…彼が、選んだ最期だつたのだから、私もそれで十分です」

リオは、最後までアジムには涙を見せなかつた。

リオがこの手紙を受け取ったのは、アジム・アブラシード・イシュヴィリアナの処刑当日だった。

処刑の時間がほんの少し遅れたのは、恋人達のほんの短い最後の逢瀬が原因であるということを知る者は、数少ない。

ああ、リオ。

結局簡単な言葉しか思いつかないんだ。
君に、きちんと伝わるだろうか。不安だよ。

リオ。

何よりも、誰よりも、

愛しているよ。

(後書き)

読んでくださつてありがとうございました。

ジルダスについてはずつといつして話を書きたかったのですが、タイミングが難しくて今までずつと放置していました。彼は「月のない空」、「太陽の消えた国」のどちらにとっても重要な人だつたと思います。

「太陽の消えた国」の方でもわずかに登場したこともあり、もうそろそろいいかなと彼の物語をこうして皆様にお見せすることとなりました。

感想などありましたら、どうぞ一言でもいいのでお願ひします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8982c/>

誰よりも愛した君へ

2010年10月8日13時56分発行